

令和 7 年度

～ 試験開始時刻 ～

一般選抜後期日程入学試験問題

総合問題

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 2 問題冊子（15 ページ）には、解答用紙 3 枚と下書き用紙 2 枚が挟み込んであります。試験開始の合図があったら、直ちに中を確かめ、印刷や枚数の不備などがあった場合、監督者に申し出なさい。
- 3 問題冊子の間に挟み込んである解答用紙を取り出し、すべての解答用紙の所定欄に受験番号を記入しなさい。
- 4 解答はすべて、解答用紙に横書きで記入しなさい。間違っても下書き用紙に記入しても、回収しません。
- 5 句読点は、一字と数えなさい。
- 6 試験室で配付された問題冊子及び下書き用紙は、退出時に持ち帰りなさい。

このページは白紙です。

このページは白紙です。

問 題

課題文①・②・③を読んで、次の問いに答えなさい。

- 問1 課題文①において、既存のルールを変更する際、どのような困難があると筆者は考えているか、80字以内で述べなさい。
- 問2 課題文②で述べられている内容を踏まえると、伝統的に村の意思決定の方法として全員一致制がとられていたのはなぜだと考えられるか、過半数制が抱える課題とあわせて120字以内で述べなさい。
- 問3 課題文③下線部に「こうした適応的な社会的学習戦略は、いつもうまく働くわけではない」とあるが、それはなぜだと述べられているか、150字以内でまとめなさい。
- 問4 課題文②で述べられている「村の意思決定のしかた」と課題文③で述べられている「集団の知恵」は同等か、それとも異なるものか、あなたの考えを150字以内で述べなさい。
- 問5 集団で意思決定する際に、何が大切だと考えますか。課題文①・②・③を踏まえつつ、具体的な場面を想定して、あなたの考えを500字以内で述べなさい。その際、それを大切にすることで生じうるマイナス面も文章に含めること。

課題文①

あるルールが、正しい行為と間違っただけの行為を区別する基準として機能するとき、そのルールは正義と呼ばれます。私たちの社会はそうした正義なしには成り立ちません。だから、ルールを変えることができる、ということは、決して、いかなるルールも必要ではない、ということの意味するのではないのです。私たちはあくまでもルールに頼って生きています。問題なのは、そのルールが一つではないということ、変更されうるものだということです。

当然のことながら、ルールの変更が起きるとき、つまり正義が移り変わるとき、それに支えられた既存の社会は不安定になります。それまで自分が正しいと思っていた行為が、実は間違っていたことになるからです。

ヴィクトル・ユゴーの小説『レ・ミゼラブル』は、そうした正義の変更に翻弄される人々の運命を、多層的に表現した作品であると言えるでしょう。

物語は、もともと犯罪者であった主人公ジャン・バルジャンが、フランス革命をはじめとするさまざまな出来事に遭遇するなかで、聖人へと変容していく様子を描いていきます。そして、宿敵として彼と何度も対峙するの^{たいじ}のが、ジャベール警部です。

物語の冒頭、刑務所から仮出所した彼に、ジャベール警部は「危険人物」であることを表す証明書を渡します。当時の社会では、罪を犯したバルジャンは、仮出所しても依然として公的な監視の対象だったのです。バルジャンは罪を犯したのであり、ルールに違反しました。それに対して、彼を監視するジャベール警部は、あくまでもルールに則^{のっと}って行動しています。ジャベール警部は、自分こそが正義を実現していると信じて疑わないのです。

心の荒^{すさ}んだバルジャンは、教会にあった銀の燭^{しよく}台^{だい}を盗み、警察に逮捕されます。仮出所したばかりの彼が窃盗罪で裁かれれば、より重い刑を処されることは間違いありません。ところが、教会の神父は、その燭台は盗まれたのではなく、自分がバルジャンに渡したものだ、と警察に説明します。それによって、バルジャンは無罪となって放免されることになりました。バルジャンはこの神父の行動に驚愕^{きやうがく}します。そして、自分自身もこの神父のように、正しく生きようと決意するのです。

ここで注目すべきは、この神父もまた、実はルールに反する行為をしてい

る、ということです。なぜなら、神父は警察に対して偽証をしているからです。神父の行為は当時の社会の正義に従えば正しくない、ということになります。しかし、神父はむしろ、自分の行為こそが正しいと確信していたはずです。つまり、この状況においては、社会の正義に従わないことこそが正しい、と判断していたのです。

その後、バルジャンは人生を通して、神父が実践した「正しい生き方」を追求します。その様子を目の当たりにしながらも、ジャベール警部は、依然として彼に対する疑いを解きませんでした。一度罪を犯し、仮出所中に窃盗を犯した彼は、きっと邪悪な人間に違いない。そう信じて疑いません。なぜなら、それがその社会の常識であり、正義だからです。しかし、バルジャンはそうしたジャベール警部の思い込みを、あるいはその社会の常識を、覆すような善行を実践していきます。

あるとき、バルジャンとジャベール警部は革命の動乱に巻き込まれることになりました。バルジャンが革命派に関わることになった一方、体制派のジャベール警部は、スパイとして革命派の中に潜入することになりました。非常に危険な任務であることは言うまでもありません。不運にも、ジャベール警部はスパイであることが露見し、革命派のメンバーから殺害されそうになります。ところがそのとき、バルジャンが彼の命を助け、秘密裏に逃がしてやりました。この出来事もまた、ジャベール警部にとって、極めて大きな衝撃でした。バルジャンが邪悪な心を持った犯罪者である、という彼の先入見は、徐々に揺らぎ始めるのです。

その後、バルジャンとジャベール警部は再び対峙します。ところが、ジャベール警部はもはやバルジャンを逮捕しようとはせず、そのまま見逃してしまうのです。彼は、もはやバルジャンを疑い続けることができなくなり、彼が正しい道を追求する聖人であることを、認めざるをえなくなったのです。

この物語が示しているのは、「正しい生き方」というものが、決して社会のルールに単に従うことではなく、その都度、自分で判断しなければならないものである、ということに他ならないでしょう。

バルジャンが巻き込まれていったフランス革命は、歴史的にも、ヨーロッパのルールに大きな変更をもたらした出来事でした。

当時、フランスでは王政が敷かれており、人々の間には身分の格差が厳然と存在していました。国民は貧困で苦しんでいるのに、貴族は税金を巻き上げて贅沢

な生活ができる——そうしたことが当たり前のように行われていたのです。しかし、それが当時の社会のルールであり、正義だと見なされていました。革命は、こうしたルールに対する反逆として引き起こされたのです。

しばしば、フランス革命はヨーロッパにおける「近代」の始まりを告げる象徴的な出来事として捉えられます。それは、この革命が単に王政の解体を引き起こしたからだけではなく、普遍的な人権の概念を掲げ、「人間は生まれながらに平等である」という思想を広めることになったからです。このような考え方は、それまで決して当たり前のものではなく、むしろ正義に反する思想でした。人間は生まれながらに不平等であり、貧民と貴族の間に格差がある——そうした考え方を、フランス革命は根本からひっくり返したのです。当然のことながら、それによってもたらされた人権や平等といった概念は、今日の私たちの社会でも重視されています。

この意味において、フランス革命は反逆によってルールの変更を実現させた、一つの例であると言えるでしょう。しかし、注意しなければならないのは、それが必ずしも喜ばしいことばかりをもたらしたわけではない、ということです。

フランス革命を成功させた国民たちは、革命に賛同しない者たちを摘発し、あろうことか、司法を介することなく虐殺していきました。^{ろうこく}牢獄が民衆によって襲撃され、囚人のほとんどが殺されるという事件も起きました。また、貴族を捕まえて残虐な形で殺し、身体を切断してさしものにする、という事態も起きました。こうした目も覆いたくなるような残酷な出来事が、次々と引き起こされていたのです。こんにち、「テロ」と呼ばれている概念は、もともとフランス革命の後に出現した、こうした「恐怖政治」を指す言葉でした。

ここには、ルールを変更するということの困難さが証明されています。その変更の正当性を、ルールそのもので説明することはできません。ルールの変更が成し遂げられるとき、その過渡期においては、「何をやっても許される」という無秩序な状態が出現してしまうのです。

既存のルールに怒りを抱き、そのルールに反逆することを決めた人は、文字通り、どんなに恐ろしいことにも手を染めることができます。フランス革命のあとの残酷な事件の数々は、そうした暴走の結果である、と考えることができるのではないのでしょうか。

そうであるとしたら、こうした暴走に陥らずにルールを変更するには、どうし

たらよいのでしょうか。もしも、「正しい」反逆があるとしたら、それはどのようなものなのでしょうか。

戸谷洋志『悪いことはなぜ楽しいのか』（ちくまプリマー新書、2024年）による。一部改変。

課題文②

村の意思決定のしかたとして、二点をみる必要があります。ひとつは決定組織としての「寄り合い」です。もうひとつは意思決定のしかたとしての「全員一致制」です。

寄り合いとは構成員全員が集まって何かを決めることです。自治会の総会をイメージすればよいかもしれません。

寄り合いと反対のイメージは、トップダウン型です。村にトップダウンがないとはいえませんが、都会の人が考えるほどには強力ではありません。会社のほうがはるかに多いと言えるでしょう。その理由は、村はその本質がコミュニティであるからです。つまり個々の構成員を無視できないのです。

全員一致制の反対のイメージは、過半数制です。過半数制は賛否の意思表示をしてもらって、人数の多いほうの決定に少数者が従うというものです。わたしたちはこれを民主主義教育とセットで第二次大戦後、アメリカ合衆国から取り入れました。わたしたちは小学校のクラスでそれを最初に学びます。

文化の輸入のときにはしばしばそうなるものですが、かたちだけを取り入れて、そのシステムが完成するまでの歴史は無視されます。したがって、過半数制＝民主主義という理解になりました。そのため、少数者がもつ権利や少数者に対する寛容というような課題はほとんど考慮されることなく、これが実行されていくことになったのです。

村の寄り合いといえば、宮本常一の報告による対馬の伊奈村（現・対馬市）の数日かけて話し合う寄り合いが有名です。寄り合いの長所は相互納得ということもありますが、いろいろな多様な視点からの意見が出るところかと思います。

たとえば十ほどの多様な意見のうち、結果的にはなるほどと思えるひとつの意見が選ばれることになりますが、その選択には見事に関係者のエゴイズムがほど

よく抑えられているはずです。

なぜかという、時間をかけた衆議ではいわゆる利害の駆け引きが徐々に消滅して、社会通念が表に出るからです。当事者どうしではどうしても利害の駆け引きになってしまいます。たしかに寄り合いでも利害が少しは残るのですが、社会通念が基盤になるものになります。

また、いま名前を出した宮本常一は「村の寄りあい」という文章のなかで「他人の非をあばくことは容易だが、あばいた後、村の中の人間関係は非をもつ人が悔悟するだけでは解決しきれない問題が含まれている」と指摘しています。やや分かりにくい言い回しですが、宮本はその後のつきあいに支障がないようにすることの大切さをここで言っているのです。

非をあばくというのは、事実指摘と論理にもとづきます。したがって短時間で明瞭になります。しかしなにごとともそうですが、誰かに 100 パーセントの“非”があるということはそうそうなくて、70 パーセントは非であるとして、残りの 30 パーセントをどうするかという問題が残ります。

そこで宮本はいうのです。「論理づくめでは收拾のつかぬことになっていく場合が多かったと想像される。そういうところではたとえ話、すなわち自分たちのあるいてき、体験したことにとことよせて話す」という。“ことよせ”とは物語であり、物語は頭で理解する論理ではなくて、いってみれば体全体で体得するものです。物語には残りの 30 パーセントも含まれているのです。

宮本は対馬の例を紹介したのち、つぎのように述べています。「すくなくも京都、大阪から西の村々には、こうした村寄りあいが古くからおこなわれてきており、そういう会合では郷土も百姓も区別はなかったようである。領主－藩士－百姓という系列の中へおかれると、百姓の身分は低いものになるが、村落共同体の一員ということになると発言は互角であったようである」。

この寄り合いのあり方は、部落会や町内会と名前を変えながら現在の地域の自治会にまでたどり着きます。そこでは原則として上下の関係はありません。

ただ、徹底的に話し合うという面はほとんどの地域では消滅しました。それは現在の地域自治会が生活のほんの一面しか担わなくなったからです。

しかしその一方で、ボランティアを中心とした「まちづくり」が 30 年ほど前から台頭し始めました。これは文字どおり、まち（コミュニティ）を創っていくことですから、戦略・戦術が必要になってきます。そのため徹底的に話し合うと

いう喜ばしい現象も少なからず生じつつあります。

ただ、このボランティア活動はいやになれば簡単に抜けられます。それに対して、村の寄り合いのメンバーは、その地域に生涯責任を負う覚悟が必要です。ここでどちらがよいかと議論する必要はありませんが、この違いに自覚的である必要はあります。

先ほど述べたように、会議での決め方には大きく分けて、構成員の半数以上が賛成したことに従う過半数制と、全員が一致するのを待って決定する全員一致制のふたつがあります。

前者の過半数制（多数決原理）は、第二次大戦後に成立した「日本国憲法」に基づいて、とくに学校で強く奨励されるようになりました。ただ、詳しく調べてみると、過半数制は日本にも伝統的にありました。「多くの方が賛同されているようで」という言い方で決めることが多くあったのです。道普請*の日取りの決定とか、祭りの準備のための集合時間などがそうです。ただ村では深刻な問題については必ずと言ってよいほど全員一致制をとりました。

1956年から57年にかけて奈良県天理市上之庄^{かみのしょう}に住み込んで調査をした文化人類学者の米山俊直の記録を、やや長いですがここに引用しておきましょう。村における全員一致制のイメージを明確にしてもらうためです。米山はこの引用文では、「上之庄むら」と、ひらがなを使っています。

連帯をつくり出すのは、むらの人々の会合である。そこにはたとえ多少の貧富の差はあっても、もともと大きい階層差を意識しない一戸一人の代表制による合議の原則が、いまでも強く働いている。そして、その原則がつかぬかれるためにあるのは、おどろくほど徹底した話し合いの精神だといえる。これはいわゆる民主主義の原理にちかく、“グラス・ルート・デモクラシー”といわれるものに似ているが、特徴的だといえるのは、けっして多数決という、数量的原則をもちださないことである。つまり、ひとつの問題を解決し、むらの全構成員をある行動にうながすためには、かならずその全員の一致——万場一致の結論が出ていなければならないのである。

これは、実際にはリーダーにとって非常に忍耐が必要なことだといえる。全員が納得し、やろうという気になるまで、むらの会合はいつまでも続けられる。合意点が見出されるまで、徹底した話し合いが繰り返されるのであ

る。もしも反対があれば、どのようなことでも話を決めてしまうということはない。ときにはその結果、むらの活動は停滞するかに見える。しかし停滞というマイナスは承知の上で、この全員の一致の原則は守りぬかれている。

この文章につづいて米山は、判断には村の人たちの実利と結びついた「きわめて常識的、合理的」な考えが支配していると指摘しています。

村が伝統的に全員一致制をとっていたことはつとに知られている事実です。そして、この全員一致制は現在も意外と社会全体に広がっています。(中略) 全員一致制である場合は、会議を開いているその時間だけで決めるのではなく、別の場において事前に話し合う手続きが不可欠です。それは伝統的には「根回し」という農林の作業で使われることばで呼ばれています。

鳥越皓之『村の社会学——日本の伝統的な人づきあいに学ぶ』(ちくま新書、2023年)による。

一部改変。

注

- ・道普請……地域住民の協同作業による道路の補修。

課題文③

ダーウィンの時代には、他個体を模倣できる動物はせいぜい霊長類に限られるだろうと考えられてきたし、ましてや文化は崇高な「人間らしさ」の象徴であり、生物学者が頭を悩ませる対象とは考えられていなかった。しかし今では、シヨウジョウバエだけでなく、トゲウオやグッピー、シジュウカラ、あるいはザトウクジラに至る、さまざまな動物が社会的学習を行うことが知られていて、群れ特有の文化を持ちうることが実証されている。たとえばザトウクジラが唄う歌には個体群特有の旋律があり、まだ原因は明らかでないが、その旋律は南太平洋を西から東へと、まるで流行歌のように伝播^{でんぱ}する。あるいは、エサ箱の扉を特定の方法で開けるよう訓練したシジュウカラの個体を野生個体群へと導入すると、その独特なエサ箱の開け方は群れ全体へと広まり、文化として根付く。このよう

に、「猿まね」はもはや猿の特権ではなくなったし、文化は自然界においてさほど珍しいものではなくなった。

だが、動物の文化や模倣について知れば知るほど、人間文化との溝はかえって深まっていく。人間という大型類人猿が、地球上の至るところにまで生息域を広げ、個体群密度をここまで高めることが可能だったのは、人間が文化を持ったからだ。人間の文化とは、たとえば狩りのための道具を作る方法、イモを調理前に下処理して解毒する方法、食材の選び方、あるいは農耕や灌漑^{かんがい}など、「食っていく」ために必要な技術や知識。または、誰と友好的につきあうべきか、誰と結婚してよいか、ルールを破った者に対してどう対応すべきか、といった、社会のなかで円滑に生きる方法や規範、法律。あるいは、絵画や演劇といった芸術も当然、人間の文化だ。人間の文化だって、社会的学習に基づいて維持される行動には変わりなく、「動物の文化」に含まれる一つの特異な事例にすぎないはずだ。にもかかわらず、人間の文化と人間以外の動物がみせる文化との間に隔たりを感じるのは、人間の文化が累積するからだ。昔の人から受け継いだ知識に修正を加えたり複数の知恵を組み合わせたりしてイノベーションを生み出すと、そのイノベーションだったものが、今度は次の世代にとっての新たな知識の土台となる。一方、人間以外の動物においては、知識や技術レベルが世代を超えて積み重なり、オープンエンドに複雑化できる累積的文化は知られていない。

この差はどこから生まれるのだろうか。おそらく、人間の文化を支えるメカニズム、つまり人間の社会的学習やイノベーション、あるいは文化的情報の伝搬という現象そのものが備える性質のどこかに、そのヒントがあるに違いない。

(中略)

多くの動物は実際、臨機応変に、「賢く」模倣をすることが知られている。たとえばトゲウオという小魚のメスは、妊娠すると卵を抱えて膨らむので目立つし、動きも緩慢になるため、捕食者に狙われやすくなる。すなわち、妊娠という身体状態の変化によって開かれた場所で餌を探し回ることのコストが増加する。妊娠中のトゲウオのメスが餌を探す際は社会的学習へ大きく頼ることが実験で示されている。他にも、さまざまな動物で、こうした巧みで戦略的な模倣行動が実験的に観察されている。つまり動物は、状況やタイミングを見極め、「ここぞ」という場面で模倣を行うのだ。こうした戦略的模倣は各個体にとって利益となるばかりでなく、集団全体の利益となることがある。いわば、社会的学習で互いに

学び合う集団には「集合知 (Collective Intelligence)」が創発するのだ。

「ここぞ」という場面でのみ社会的学習で知識を仕入れるということは、裏を返せば、普段は自分の利益を高めるためにベストと信じる選択をしているということだ。最良と信じる行動を取ることは、膨大な選択肢の中からうまくいきそうな行動だけを「ふるい分け」することでもある。大勢の個体たちがそれぞれにふるい分けした行動を集約すれば、全体として、そこにハズレは少なくなるだろう。これは「集団の知恵 (Wisdom of Crowds)」、すなわち「みんなの意見は案外正しい」という効果だ。賢い模倣は、ここぞという困ったときにだけ、集約された集団の知恵を利用する側に回り、恩恵を受ける。

こうした「ここぞ」というときに模倣する戦略は、「いつ戦略 (when 戦略)」と呼ばれている。一方、誰を模倣すべきかを巧みに見定める「だれ戦略 (who 戦略)」も考えられる。たとえば狩猟採集において、優秀なハンターほど評判がよくなり、より注目され、より模倣される。これは「名声バイアス模倣」と呼ばれる。一般に、成功者の行動や、成功によって権威を得た人物の行動をまねれば、でたらめに振る舞うよりは上手くいく見込みは高まるはずだ。

あるいは、集団の多数派を占める行動を模倣する「多数派同調」も who 戦略の一つである。この戦略も、集団の知恵を巧みに利用する。集団のなかで、多くの個体が、各自の信じるベストな行動を取っているとしよう。環境から得られる情報には不確実さがあるから、なかには質の悪い選択肢を選んでいく個体も紛れていることだろう。しかし全体を合算してみれば、情報の不確実さは打ち消し合い、統計的には最も多くの個体を選ぶ選択肢が、最もよいものである見込みが高くなる。これも集団の知恵の効果だ。

だが、こうした適応的な社会的学習戦略は、いつもうまく働くわけではない。ゴルフのプレイ技術はゴルフの権威を見習うことで向上させることができるかもしれない。しかし、ゴルフの成功に直接は無関係だった事柄、たとえばファッションや生活スタイルを模倣しても、ゴルフが上手くなるわけではないだろう。またゴルフの技術といっても、素人からは、プロのスウィング動作やルーティーンのうちどの部分が本質的に重要で、どの部分は無視しても差し支えないのかが簡単には弁別できない。だから結局すべての動作を忠実にまねる。すると結果的に、あまり重要ではない行動や、場合によってはむしろ害にさえなりうる行動まで一緒に模倣してしまうかもしれない。

また、多数派が全体として間違えていることもありうる。この場合、多数派同調は、かえって間違いを増幅させるかもしれない。名声バイアスが、権威者から模倣者へと一方向へだけ流れる情報伝達だったのに対し、多数派同調は、現時点での模倣者が次の時点の多数派（模倣される側）に加わることで雪だるま式に、自らが自らを強化する正のフィードバックを生み出す。これが、群衆行動、あるいは「集合愚」とよばれる現象の原因の一つだと考えられている。多数派が特に間違いやすいのは、環境が変化した場合だ。互いに模倣し合う個体たちは、外的環境が変化しても素早く柔軟に対処できず、前の環境で上手くいっていた行動に固執してしまう。この現象は、あたかも物理的な慣性で動きが止まらなくなった物体を思わせるので、「文化的慣性」と呼ばれる。

このように、「集団の知恵」と「集合愚」は、コインの裏表のような関係だと考えられてきた。集団の知恵の恩恵を利用する賢い模倣、すなわち適応的な社会的学習戦略が、時に集合愚を生む。集団のメンバーの意見分布がもともと正しい方向へ偏っていれば、賢く模倣し合うことによって、正しさが増幅される。一方、意見分布がもともと間違った方向へ偏っていた場合には、互いに模倣し合うことで間違いが補強されてしまう。各個体のもともとの意見分布が、社会的学習を通じて流通し、「集約される」という従来の集団の知恵モデルのもとでは、このコインの裏表関係は必然的で、いかにも頑健に感じられる。

しかし、実際の集団意思決定は、もっと「時間的に深い」現象だ。すなわち、個体の価値観や意見分布は、社会的学習を通じて単に集約されるだけでなく、時間発展的にアップデートしていく。時間発展的なシステムのなかでは、各個体が、学習と模倣を織り交ぜながら、次の時点における意思決定の土台を逐次構築する。そのような、学習と模倣とが時間的に重なり合って進む集団意思決定では、単なる意見の集約モデルでは予測できなかった効果が発揮される。たとえば最近の研究で、多数派同調と試行錯誤学習が上手く噛み合うと、たとえ個体たちにリスクを避けたがる傾向が備わっていたとしても、集団学習を行うことで長期的リターンの高い高リスク行動を選択する可能性が上昇することが理論と実験で示された。つまり、時間発展的な社会的相互作用の下で創発する意思決定パフォーマンス、すなわち「集合知 (Collective Intelligence)」は、統計的な単なる意見の「寄せ集め」を越えた非線形効果を生み、ときに個体のバイアスを打ち消してしまう。そこにこそ、社会的学習し、集団で意思決定することの適応的意義

が隠れているに違いない。文化の進化的起源は、多数決的な「集団の知恵」ではなく、もっとダイナミックな「集合知」として理解すべきなのだろう。

豊川航「賢い模倣、人間の文化、集合知」（『現代思想』第51巻第1号、2023年1月）による。

一部改変。

